星をわたる列車

橘高　有紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星をわたる列車

【Ｎコード】
Ｎ６３１９Ｉ

【作者名】
橘高　有紀

【あらすじ】
星を渡る列車に乗って少年リンは旅に出る。遠い異界の地へと――
そこは発達したテクノロジーと、自分たちとは違うヒトビトに囲まれた場所。見たこともない不思議な世界に少年は目を輝かせた。途中、出会ったのはゴクラクチョウの車掌に幽霊の貴婦人、王子さまみたいなネコの少年だ。
彼らの旅は、今始まったばかり。

1

『――駅。当列車は第三星海ボグランジャー星、クノイマル行きです。これよりしばらくの間、列車は点検の為停車いたします。繰り返します。ご乗車お疲れさまです、終点……』

列車の止まった軽い衝撃と駅のアナウンスに、舟をこいでいた頭がかくんっと折れ曲がった。いつの間にか眠りこけていたようだ。リンは夢の中にもぐりこもうとする意識を押しのけて、瞼をうっすらと開いた。軽く背筋を伸ばして欠伸し、

「え……何駅？」

寝ぼけまなこでずるずると、列車の窓から駅を覗いた。メガネの下から器用に目をこすって見た、色んな『ヒト』たちでごった返す駅の名前は。

「エンジャーグル……？」

言いながら大きく欠伸をした。目じりに浮かんだ涙をこしこしと左手でこする。そうしながらボロボロの鞄を足元からよっこらせと持ち上げて、中に右手を突っ込んだ。出てくる欠伸をかみ殺し、がさがさと覗き込みつつリンは一つの紙切れを取り出す。ぼろぼろの紙切れに、ゆっくりと指を這わせた。

「エンジャーグル……エンジャーグル……。あっ、そうだ、乗り換えなきゃ。えーっと、乗り換え……乗り換えはどこでするんだっけ？　あ、そうだ、聞きなさいってアニエスが言ってたんだっけ」

とろんとしたまま、リンはコンパートメントの扉を引いた。子どもの手には少し重い扉は、ゆっくりとスライドしていく。たった一つの荷物であるリュックを背負って、通路に出た。茶色に塗りつぶされた扉が、背後で閉まっていく。

頼りない足取りで歩いた列車の通路には、薄い古びたじゅうたんが敷き詰められてあった。赤い色のじゅうたんは、新しいものだったならふかふかしていたのだろう。今は何年も――もしかしたら何

十年も――靴の下敷きになったせいで、中央部分は黒ずんでいる。赤色だと判別できたのは、壁際のみ、本来の姿を残してあったからだ。昔は、市松模様のきれいな通路だったのだろう。片側には大きく切り取られた窓が、片側にはコンパートメントの扉が、車両の終わりまで続いている。

一直線に見渡せる車両には、ヒトがほぼいなかった。エンジャーグルは終着駅なので、すでに乗客は下車しているのだ。そこに、コンパートメントの扉が一つ、からりと開いた。派手な色彩の車掌が出てくる。三つ手前の駅から顔を合わせていた彼は、乗客が残っていないか、忘れ物はないか点検（チェック）しているのだ。

何度か話したことがあった。リンみたいな子どもにも、丁寧でやさしいヒトだった。ようやく頭がさえ始めてきた。あのヒトに聞こう！

ぱたぱたと走り寄る少年の姿を認め、車掌が微笑んだ。

「坊や、終点だよ。忘れ物はないかな」

「はい、だいじょうぶです。あのぉ……、クィダズ行きってどのホームかわかりますか？」

そう尋ねなさいね、と家族から言い渡されていたのだ。忘れないように先ほどのメモに書きとめてあった。遠い故郷に残してきた家族は、リンを出発間際まで心配してくれたのを、思い出す。

ゴクラクチョウを自称する車掌は、大きなくちばしを少し開いて首を傾けた。真っ黒でまん丸な瞳が数度瞬き、「エンジャーグルは六番ホームだね、たしか」と教えてくれる。

「クィダズなんて、ずいぶん遠くへ行くんだねぇ。あんな場所へ何の用があるんだい？　何にもないところだけど」

帽子を被りなおした車掌の表情に、一抹の懸念が混じった。リンはきょとんとする。

「そうなのですか？」

「うん。観光地でもないし、行くヒトなんてそういない場所だよ。坊や……ひとりなのかい。一緒に男のヒトがいただろう？」

誰もいない少年の背後を、ちらっと車掌が一瞥した。どうして子ども一人でこんなところに？　と心配してくれているのだ。あ、とリンは慌てて口を開いた。この問いかけは、もう何度も受けてきたのだ。

「えーっと、あの人はひとつ前の駅まで一緒にいてくれたんです。ぼくは、その、お使いを頼まれちゃってて」

少年が誇らしげにはにかむと、「そうなの」と車掌は大きな丸い目をさらに大きくした。目が零れ落ちそうだ。あまり突っ込んだことを聞かれる前に、と少年は早々に辞退を決める。ずり落ちた鞄を背負い直し、ぺこりとお辞儀した。

「六番ホームですね。ありがとうございました」

その拍子にばらばらと鞄の中身が散らばった。あ、と言ったときには遅かった。先ほど鞄の口をちゃんと止めなかったのだろう。頭の片隅に残っていた眠気がすべて吹き飛んだ。わーっ、ばかばか、と仰天して拾い集めた。あわあわしながら、すみません、と情けなくリンが笑う。

ふ、と車掌の顔に笑みがこぼれた。おやおやと一緒になって拾ってくれる。かぁぁ、と頬を朱色に染めたリンは、「ありがとうございます」と恐縮した。

「お礼は、しなくていいよ」

小さくなったリンの頭を、笑いをこらえた車掌がぽんと撫でた。柔らかな羽毛がふんわりと触れる。極彩色の色をした車掌は手を振りながら、

「エンジャーグルは広いから、迷子にならないよう気をつけるんだよ。わからなければ、案内板をみて。……充分に注意してね」

車掌の笑顔がわずかに曇った。子どもひとりなのを、案じてくれているのだ。リンは、はい、と大きくうなずいた。大丈夫です、という意をこめて元気良く列車を降りていく。

そして思わず立ちすくんだ。目の前を、見たことのないヒトビトがよぎっていくからだ。車掌の鳥のような姿も不思議だったが、植

物みたいなヒト、魚のようなヒト、岩のようなヒト、機械のようなヒト……たくさんの種族が溢れかえっていたのだ。大きさもそっくり返るほど大きかったり、リンの手のひらに乗るほど小さかったりさまざまだ。

アナウンスと途絶えることのないざわめきに、少年は息を詰めた。ぱぁぁと表情が明るくなっていく。この駅がエンジャーグル（最果ての駅）。――こんなにもぼくは、遠いところまでやってきた。

一歩足を踏み出したそこは、人の世界から隔離した異界の地。

リンの故郷とはまったく違う場所！

ヒトビトのみではなく、駅にも、圧倒されてしまう。あの巨大な星間列車が何台も停車しているのだ。数えてみれば、一、二、三、四……きっと目の届かない位置にも停車しているはずだ。ふと列車を振り返った。古くて大きくて傷だらけの列車は、他のどれよりも貫禄があった。どしん、とこの世界に馴染んでいる。列車の窓から、あのゴクラクチョウの車掌が、がらんどうのコンパートメントをチェックしている姿が見えた。

もう、あの列車に乗った旅は終わったのだ。

ここから、新しい旅が始まる！

ドキドキが、おさまらない。リンは緊張しながら、多種多様なヒトビトの波をすり抜けた。案内板をホームのすぐ近くで発見したのは、幸運だった。こんなにも広く大きな駅なのだ。車掌が教えてくれた通り、リンはすぐ迷子になれたはずだ。

六番ホームの位置を確認する。もっとも最初は戸惑った。ディスプレイに触れて下さい、とあるのだから。リンの理解できる言葉で書かれていてよかった。小さな指で恐る恐る触れれば、突如立体映像が飛び出てくる。「ひっ」と小さく悲鳴を上げたのはご愛嬌だ。

『ご利用いただきましてありがとうございます』

中性的な音声が流れた。なに、これ！？

半ばパニックになりながらも、ただの案内表示であるとわかってリンは胸を撫で下ろす。カードやＩＤがどうと指示されたがわから

ない。案内板は、リンがどれも持ってないとわかると、ディスプレイにタッチしながら操作を進めて欲しい、と指示してくれた。
読める文字を選択して、ドキドキしながらリンは指先で軽く触れていく。今いるのは一番ホームで、六番ホームとは正反対の位置だった。場所さえ確認できれば十分だ。
感嘆の息をついて、改めて駅を見渡せば、エンジャーグルはとても大きかった。今までもいくつかの停車駅を越えてきたが、これほど大きく立派な駅は初めてだ。きょろきょろと四方を見渡しては笑みを浮かべた。首をそらすほどに高いホームの天井では、宙に浮いた機械がふよふよと通り過ぎていく。あちこちで明滅している光はどういう意味があるのだろう。地面はむき出しじゃないし、この場所じゃ空も見えない。あふれているのは見たこともないヒト、ヒト、ヒト……。
胸の高鳴りを抑えきれなかった。故郷のみんなに教えてあげたい。こんなにもすごいところに来たんだよ、と。

ねえアニエス、エンジャーグルってどんなところなの？

出発前に、リンは親代わりのアニエスに尋ねた。アニエスは「想像もできない場所にちがいないわ」と微笑んでくれた。――アニエス、本当にその通りだった。とっても不思議で、ぜんぜん別の世界みたい。だって何が何なのか、全然わからないんだ。
「きゃっ」
「あ、ごめんなさい」
不意に横手で上がった声に、リンは慌てて頭を下げた。その刹那、血相を変える。透明な貴婦人の腰辺りに、自分の身体が入り込んでいたのだ。
お化け！？
身体を強張らせたリンの頬に、ひやりとしたものが触れる。肘まで届く長い手袋をした手だった。ほっそりとした指がすっと頬をな

でたのだ。
「いいのよ、ぼうや。それより早く通ってくれないかしら。わたくしは、まだ受け取らなきゃならない荷物があるの」
美しいドレスに日傘をさしたご婦人は、艶やかに微笑む。キレイなヒトだったが背後が透けて見え、リンを驚かせた。言葉にならない悲鳴をあげ、少年はそそくさと急いだ。どくどくと心臓は、主張を続ける。顔は火照って、息が弾んだ。びっくりした。わからないことだらけなのは、駅だけではなかった。同種族ばかりの故郷とは全然違う。
「うわ！？　気を付けろよなー！　ここは俺たち専用だぞ」
小さな種族を踏みつけそうになって、リンはまたしても飛び上がった。え、と確認すれば、小人専用、と書かれた通路に踏み込みかけていたのだ。わらわらと小さな者たちに囲まれ、狼狽する。小人の基準は、だいたいリンの腰から下のようだった。リンは立派に「大きなヒト」だ。
「ご、ごめんなさい」
泣きそうな面持ちでいると、「待って待って」と耳を引っ張られた。え、と戸惑うリンの眼前に、虫のような生き物がぶうん、と飛んでいる。図鑑で見たテントウムシに近い形だ。しかし、大きさが全然違い、リンの両掌ほどもある。ええ？　と息を呑めば、それが小人の乗り物だと知れた。乗り物の脚が動いて、リンを引っ張っていたのだ。
「どこへ向かうの？　ビッグサイズが来るんだから、飛び出しちゃダメだよ。アナウンスが流れてるでしょ」
小さな脚が器用に指してくれた方向を見て、リンは仰天した。のそりのそりと大柄な種族が歩いてくる。リンを縦に三人足してもお釣りがもらえそうな、恐竜みたいなヒトだ。ゆっくりと脚を下ろすたび、微細な振動を伝えてくる。うろこに覆われた身体と、太い尻尾が誇らしげに揺れていた。あんな大きな『ヒト』も、列車に乗って旅をするのか。

ぽかん、としていると「すげーよなぁ」と耳元で、同じく見とれていた虫もつぶやく。六番ホームの場所を改めて尋ね、行くべき方向を教えてもらって、リンは礼を言った。

「ありがとう！」

「どういたしまして。注意しないと危ないぜ。ここ、でっかすぎて迷子も多いらしいから！　じゃーね」

ぶうん、と羽音を鳴らしながら、小人は元の通路へ戻っていった。ああいう乗り物も、すごいと言えばすごい。先ほどから空中を飛び回っていたのは、彼らの乗り物だったのだろうか。

呆然としていたリンは、ぺちりと頬を叩いた。しっかりしなくちゃ。ぼくは……ひとりなんだから。唇をきゅっと結び、リンは小走りで六番ホームを目指す。お気に入りのリュックサックがぽんぽんと背中ではずんだ。途中、さまざまなヒトビトに目を回した。ちょろちょろと走っているリンを、珍しそうに見るヒトが多い。好奇な目線が忌み嫌う類ではなかったので、怯えずにすんだけれど――。

走りながら知ったのは、自分と同じ『人間』、もしくは『人族』と呼ばれる種族の少なさだった。最初に列車へ乗り込んだときは大勢いたのに、エンジャーグル（最果ての駅）ではまったく見ない。みんな、それまでの駅で降りてしまったのだ。たしかに、列車で知り合った人の中で、エンジャーグルまで旅をする人はいなかったが……

ふるふるとリンはかぶりを振った。今は、それもどうでもいいことだ。

迷子になりながら着いた六番ホームは閑散としていた。視界が一気に開け、リンは瞬く。他のホームに比べて、ここはかなり小さかった。その中央に、列車が停車している。先ほどまで乗っていた列車に比べ、一回りは小さく短い。だが、鈍く光る黒はぴかぴかと輝き、鮮やかな赤のアクセントが映えていた。新しく買ったばかりの玩具のようだ。

「あの、この列車はクィダズへ向かいますか」

わからないことがあったら、できる限りそこで働いている人に尋ねなさい。そうだね、制服を着ている人がいい。誰に訊けばいいのかわからないときは、誠実そうな人を探しなさい。

耳の奥で木霊する家族の声を聞きながら、駅員さんだと思ったヒトに尋ねた。ウサギのような『ヒト』はビックリしたのか、唖然とし、数度瞬いた後、リンをまじまじと見つめた。不思議そうにしたリンに気づき、彼がこほんと咳をする。

「ええ、行きますよ。ご乗車はこちらからどうぞ」

リンの顔がぱっと輝く。興奮した面持ちで停まっている列車を眺めた。

乗ってきた列車が、大きく傷だらけでどっしりしていただけに、ずいぶんスマートに見えた。使い込まれていない車体の窓から、煌びやかな明かりが覗く。こちらは若く勇ましい列車だ。お洒落で、かっこいい。

この列車で、クィダズに向かうのだ。

「ありがとうございます！」

ぺこりと頭を下げ、リンは頬を紅潮させて列車に足をかけた。ウサギ族の駅員が何か言っていたが、耳に入らない。列車の中で出くわしたゴリラのような車掌は、乗車券を確認するなりいかつい顔を明るくさせた。ホッと少年の顔に笑顔がともる。

こぢんまりとした車内は、いくつものコンパートメントにわかれていた。はめ殺しの窓には全てカーテンがかかっていた。刺繍の入ったカーテンだ。床にもふかふかのじゅうたんが敷いてあった。くるぶしの辺りまで沈む赤いじゅうたんに、「わっ」と少年は息を呑んだものだ。間隔を置いて洒落たランプが中を照らしだしている。丸い眼鏡を押し上げて、リンは感嘆の声をあげた。小さな列車の内装は光り輝くようだ。

2

踊るようにして、リンは空いているコンパートメントをさがした。外側からでは確認できなかったが、結構ヒトが乗っている。後ろの方まで行ってようやく空いているのを見つけると、うれしくなった。ゆっくりスライドしていく扉から、そっと中に入った。宝物を独占できたような幸福感でいっぱいだ。

赤っぽいビロードに似たシートへそっと腰を下ろすと、軽く数センチも沈んで驚いた。ドキドキした。こんなにふっくらしたシートに座ってもいいのかなぁと思う。まるでベッドのようだ、とシートをなでたときだ。コンコンというノックが耳に飛び込んできた。

「失礼。ここ、空いてる？」

突然の乱入に、リンは肩を跳ね上げさせた。憐れになるほどの驚きようだったのか、来訪者が戸惑って、

「どうかしたの？　もしかして驚かせちゃったのかな」

リンは胸を押さえてゆっくりと振り返り――凍りついた。来訪者は自分と年頃の変わらない少年だったからだ。ネコのような容姿をしたヒトで、身奇麗な格好をしていたけども。

ネコ族の少年のきりっとした眼差しは、意志の強さを感じさせた。猫の目は碧（キャッツアイ）の混ざった黄金色だ。異種族のことはよくわからないが、存在感に目が離せない。きっと、こういうヒトは「きれい」だと称されるのではなかろうか。

「……あの？」

「え、わ！？　あ、ううん、何でもないの。勝手にぼくが驚いただけだから。えーっと、空いてるよ、どうぞ」

「ありがとう」

颯爽と笑みを返され、リンの心臓は再びどっくんどっくん主張を始めた。緊張で顔が熱くなる。向かい側の席を勧めると、来訪者はごく普通にシートについた。それがさも当然という風だったので、

リンもドキドキしてはいたが意を決して腰を落とす。シートはさわり心地も座り心地も抜群によかったが、いきなり一人ではなくなってホッとする反面少し残念だ。夢の世界から現実へ、引き戻されたようで。

しかし同い年ぐらいの来訪者が、リンは嬉しかった。故郷を出てから同年代の子どもとしゃべったのは、『彼』が初めてなのだ。

ちらりと窺えば、『彼』は帽子を取っていた。青い艶やかな髪が流れ、ピンとたった耳があらわになる。煩わしそうに猫の少年は髪をかきあげた。ああ、やっぱり奇麗な少年だ。彼はコートも脱いで、見つけたハンガーにかけてしまった。コートの下は、スーツのようなきっちりとした服装だ。少年の華やかな雰囲気をよく引き立てるレースの付いたブラウスが、リンに「王子さま」だと連想させる。

髪と同じ、青いふさふさしたしっぽが揺れて、ネコ族の少年は振り返った。

「キミはどこまで行くの」

「え？　あ……えーっとね。クィダズまでだよ」

「やっぱりね。そうだと思った」

リンはあんぐりと口を開け、身を乗り出した。

「もしかして――あなたもクィダズに？」

こくん、とネコ族の少年がうなずく。車掌さんから行くヒトはそういない、と聞いてきたところだったのに！

リンも薄汚れたコートを脱ぎながら、ふと、自分のみすぼらしさに気づいた。よれよれのシャツが途端にはずかしくなる。目を何度も自分と『彼』の上をいったりきたりさせ、コートをぎゅっと抱きしめた。自分の姿を、ネコ族の少年に見られたくなかった。しかし、

「じゃあ列車を降りるまでは一緒だね。どれほど一緒かわからないけど、よろしく」

ネコ族の少年は、手をすっと差し出すのだ。真っ白な手袋をした手にリンは触れようとして、気まずそうに引っ込める。『彼』に不思議そうな表情をされたので、しどろもどろ口を開いた。

「汚れちゃうかも……」
ぴしっとした服を着た身奇麗な少年は、白いブラウスが鮮やかに映えて、どこかの王子さまのようだ。それに比べ、リンの身なりはどれほど貧相か。不釣合いだ、と肩を落とすリンに『彼』は笑った。少し高慢そうで、皮肉めいた笑みだった。
「構わないよ」
『彼』が頓着せずにリンの手を取る。あ、と思う間もなく握られた手は力強かった。満面の笑みにリンの表情が塗りかわる。
「あのね、ぼくはリン。リン・ユイです。よろしくね」
リンもぎゅっと握り返してぺこりと頭を下げた。対照的に『彼』は少し頭を傾けただけだ。
「僕はエトムント。ネコ族のエトムント・エスツェット。呼びにくかったら、好きなように呼んで」
「じゃあエド！　エドって呼んでもいい？」
エトムントは答えずにこっと笑った。それを了承と取ってリンも笑う。
丁度ビーっと列車発車前のブザーが鳴った。後に響くのは列車のアナウンスだ。メガネの少年は慌てて窓にかじりついた。瞳をキラキラと輝かせて。
「出発か……結構ギリギリだったんだ。ところで、僕は同じコンパートメントの連れを探しているんだけど……」
銀の懐中時計で時間を確認したエドが、固まった。ぱちん、と時計を閉じながら眉を寄せている。
「……何してるの」
リンはシートの上によじ登って、外を覗き込んでいたのだ。行儀悪いわね、とここにアニエスがいたら笑ったかもしれない。リンは上気した頬で、くるりと振り返った。
「だって列車が出発するんだよ！」
そう、星間列車がこれから発車する！　だがエドはますます訝しげになった。

「わかってるよ、アナウンスあったもの。じゃなくて、キミ、何してるの？　危ないからちゃんとシートつきなよ」
「え？　外見てるんだよ？」
きょとんとした表情で、見ないの？　と問いかければ、エドがつまらなそうにぷいっと視線を逸らした。足と腕を組んで「なんでそんなこと」とでも言いたげだ。リンは微かに首を傾げたが、再び聞こえたアナウンスに窓へへばりついた。
外でわぁ！　と歓声があがる。エンジャーグルは始発だった。花束やリボン、紙ふぶきが発車を祝福してくれている。これから宇宙を旅する君への、はなむけとして。
「ああ、そっか。ここ、エンジャーグルだから……」
つまらなそうに、エドがつぶやく。
そこへコンコン、と窓を叩く音が響いた。へ、とリンが瞬くと、列車の外に笑顔のお姉さんたちがいる。透き通ったガラスのような身体をしたヒトや、蛍光グリーンやピンクの羽毛を身にまとったようなヒトたちだ。花でいっぱいのかごを持っていて、こちらに向かって何かしゃべっている。
「窓あけてって言ってるんじゃない？」
リンがびっくりして窓を開けた。（窓は最初開け方がわからなかったが、お姉さんたちがジェスチャーで教えてくれた。）そのリンの眼前に、小さな花束とテープが差し出される。
「これ、あげるわ。エンジャーグルの記念に」
「気をつけてね。よい旅を！」
「あ、ありがとう！」
うれしくてリンがぶんぶん手を振れば、お姉さんたちも手を振り返してくれた。知っているヒトのいない出発が、彩られていく。どうしようもなくわくわくした。列車の発着するこの瞬間が、リンは一等好きなのだ。エンジャーグルの到着には眠っていて見られなかった分、ばっちり目に焼きつけておきたい。
最後のアナウンスが響いた。開けていた窓が自動（オート）で閉まっていく。

渡されたテープが窓の外でひらひらゆれた。
「もしかして、列車初めて？」
こちらも一応花束を受け取ったエドが呆れた目をすれば、リンは窓の外を見つめながらううん、と答えた。
「さっきまで乗ってた奴があるからこれで二回目。これじゃない奴にも乗ったことはあるよ。何回かは忘れたけど」
はぁん？　とエドは納得がいったようで口の端を上げた。
「カッコイイよね。ね？」
「そうだね」
素っ気ないエドの返事だったが、にーっと歯を見せてリンは笑う。
列車が動き出した。振動で、前後に軽く揺れる。リンは息を呑んだ。視界を惑わす紙ふぶきがどんどん流れていく。色とりどりのテープも千切れていく。急な加速を受けた。同時に慣性を緩和するシステムが働いて、身体に受ける負担が徐々に軽くなって、消える。
場を切り裂く汽笛の音は、冒険への合図に思えた。先の先、列車の走るレールは空に向かって途切れている。これから列車は飛ぶのだ。星と星をつなぐ夢の列車は、どんどんどんどん加速していく。列車がレールを駆け上る。リンが額まで押しつけて窓の外を覗き込んだ。ココからだ。
（ここから！）
だんだん遠くなる景色を見る。世界がどんどん小さくなる。列車はぐんぐん空に上っていく。
リンは勢い良く立ち上がると、荷物もそのままにコンパートメントを飛び出した。手に花束だけ持って。
「ちょ、どこ行くの？」
「ちょっと！」
エドの待ったも聞かず、一番の特等席に向かってリンは走る。
廊下へ出るころには車体が斜めに傾いていた。けれど重力制御装置が働いているせいか、平らな場所を走っているのと変わらない。少し感覚が変になりそうだ。坂を転がるように駆けているけど、普

通に平面走っているのと全く変わらないのだ。赤い絨毯の上を、赤い長靴（ブーツ）が走っていく。
最後尾にある扉をくぐり――リンは呼吸を止めた。目が、窓に釘付けになる。夢中になって、集まっていた大人をかきわけた。
「……っわあ」
パノラマの世界だった。邪魔するもののない景色の独占に、胸が苦しくなる。これから列車は真っ黒な海を渡るのだ。
ここから景色を見たのは二度目だった。一度目は故郷の星を出たときに。
ここは知らない世界だけど、自分がいたのはたった十数分だけど。もう見送ってくれるヒトなんていないけれど。あのときは、ちゃんと見られなかった光景を。
最後尾の分厚いガラスにびたっと手のひらを当てて、少年はただただ声を出す。街が、山が、小さくなって広がっていく。豆粒みたいにヒトも建物も、あっという間に見えなくなっていく。列車が雲を抜けた。きらりと輝く青は海だ。刹那せつなで目まぐるしく変わっていく景色に、瞬きをするのも惜しくなる。
ふと横に、少し遅れて出発した列車があった。窓から地上を見ている子どもが見えた。リンが手を振れば、気づいて手を振り返してくれる。嬉しくなってリンは、周りのヒトなどお構いなしにぶんぶんと手を振った。向こうにいる子も、リンと同じように景色を見て、旅をするのだ。
「よい旅を！」
そう口いっぱい言葉を乗せた。たくさんの幸せが溢れるよう、願いを込めて。
そして列車は散り散りに、それぞれの目的地へと走り出す。
数え切れないたくさんの夢や希望を乗せて。

星全体が見えたのは一体いつだろう。
だんだん遠ざかっていく星。
集まっていたヒトビトも、やがて自分の席へ戻っていく。
小さなその場所に響いていた歓声が、いつしか止んだ。リンはひとり、小さくなっていく世界を見ていた。自分のてのひらにおさまってしまうような、小さな世界を。

本当はね、行って欲しくないの……。ねえリン、行かなくて、いいのよ？

リンの笑顔にふと陰りが生まれた。笑顔のまま凍りついて、びったり張りついていた両手のひらも、やがて落ちていく。
「大丈夫だよ、アニエス、みんな。ぼくは、ここまできたよ」
最果ての駅と呼ばれたエンジャーグルも飛び出して、異種族たちのあふれる世界へと。
ぽつっと落ちた言葉を聞いたのは、この部屋の揺れる明かりのみだ。
見えなくなるまで星を眺め、名残惜しそうに小部屋を出たのはもうしばらくしてからのことだった。目に浮かんだ涙を拭いて、リンは元のコンパートメントへ足を向ける。
「エド、とーっても綺麗だったよ。だんだん街が小さくなって、わぶ！？」
突然なにかが飛んできて、リンの顔面にヒットした。吹っ飛んできたのは、リンのリュックサックだ。目を白黒させているリンに、エドが仁王立ちしてふさがった。
「荷物放り出してどこに行ってるわけ」
怒りを含んだ声だった。
「まったく信じられないよ。よくそれで旅ができているね」
大またで近づいてくるエドの剣幕にリンは尻込みしつつ、でもね、と続けようとした。それをエドが許さない。鋭い金色の瞳がリンを

睨みつける。
「キミ、一人なんでしょう？」
低い声でそう問われ、リンはかくかくと首を縦に振る。
「だったら荷物の管理くらいしっかりしなきゃ！　当たり前でしょこんなこと。僕がドロボウだったらどうするの？　もっと慎重に動けないの？　ねえ、自分がなにをしたか、ほんとうにわかってる？
下手したら列車から追い出されるんだよ」
人差し指をたてたエドに間近で凄まれ、リンは縮み上がった。エドのほうが背は高いので、余計に迫力がある。
「ご……ごご、ごめんなさい……」
肩をすくめ、上目遣いになったリンの目に涙が浮かんでいる。エドがそれを見てとると大仰にため息をついた。やってられない、という呟きが耳をかすめ、リンはぐっと歯を食いしばる。
そんなふうに言わなくても、と思うのに言葉が出ない。そうだ。エドの言うことは正しい。この鞄をなくしてしまったら正真正銘、お終いだ。アニエスやローラおばあちゃんにも言い含められていた。エンジャーグルの到着に浮かれ過ぎたのだ。
「もういいよ。荷物がなくなって困るのは、キミなんだし」
エドは興味をなくしたように元の席へついた。足を組んで、今ではなにも変わらない景色へ、視線を投げ出している。リンは泣きそうなまま、入り口のところで棒立ちしていた。ぎゅっと感触を確かめるように、鞄を抱き締める。
（そうだよね。気をつけなきゃ）
（大切なものがいっぱいあるんだから）
瞼を強く下ろして、泣きたい気持ちを押さえ込んだ。泣いてはいけない。まず、荷物の確認をするのだ。乗車券やお金、そして女王さまからの手紙がちゃんとあるのか、自分の目で確かめないと。
固い表情のまま、リンが席についてバッグをあさる。震える指先が、冗談のように冷たく感じた。荷物は、片時も離しちゃいけないものだったのだ。

3

だが、かばんの中身に変化はなかった。バッグの奥にしまった茶色い封筒も無事である。リンは封筒を引っ張り出して中身を覗いた。綺麗に赤のろう封をされた手紙が入っている。リンは胸をなで下ろした。汚しちゃいけない、とほとんど触れてもいないそれ。どの荷物よりも大切な手紙は無事だ。

乗車券やお金も、ちゃんとバッグに残っていた。エドが見張っていてくれたのだ。

しっかりしなければ。エドはリンを苛めるために、あんなことを言ったのではない。

「荷物、見ててくれてありがと」

少し声が震えたけれど、言った。ありがとうと、言えた。すると、エドは視線だけで意外そうな意図を示してきた。視線だけを向けた体勢のまま、シニカルな笑みを浮かべる。

「別に。お礼なんか言われるほどのことしてないよ。――いいの？何か盗ったかもしれないよ？」

「えぇ！？　本当なの？」

「なんで、中身確認しといて驚くのさ」

「あ？　ああ！　そ、そうだよね」

リンは気付いて顔を真っ赤にした。本当に、

「馬鹿だなぁ。もっとしっかりしなよ」

思っていたことをエドに口にされ、ますますリンが肩をすぼめる。そのとき、唐突にぴくんっとエドの耳が動いた。人間のそれよりエドの耳は性能がいいのだろう。すっと立ち上がるとコンパートメントの扉を開いた。廊下に視線を飛ばす。

「どうしたの」

「……別に、なにも。音がしたと思ったんだけど、気のせいみたい」

癖なのか、またエドが肩をすくめた。リンが不思議そうに小首を

かしげる。
「ねぇ、お腹すかない？　そろそろ夕飯だし、よかったら食べに行こうよ。実はまだとってなくて」
　エドが懐中時計を取り出して時間を確認する。ふたをぱくん、と開くと音楽が流れた。あの銀の懐中時計は、オルゴールでもあるのだろう。いいなぁ、とリンはじっと見つめる。時計は意匠が凝らしてあって高価そうだった。表に刻まれているのは……何かの紋章だろうか。古いもののように思えた。
　当然ながら懐中時計など、リンは持っていない。骨董品は値が高くて、一般市民には手が出せない代物だ。格好からも判断できたが、エドがお金持ちのご子息であることを再確認させられた。当然のように、高価なものを身に着けている。
　服でさえ、家族のお下がりを修繕して使っているリンとは、信じられない差だった。　リンが知っているアンティークといえば、故郷にある大きな古時計のみである。振り子がゆれて、ぼーんぼーん、と時を知らせてくれる時計だ。あれが兄弟のささやかな自慢だったが――エドの持つ懐中時計以上の価値は恐らくない。
　わずかに身体を後退させて、リンは苦い笑みを浮かべた。何のショックを受けているのだろう。そもそもこの列車に自分がいることさえ、おかしいのに。
　お金持ちのエドが声をかけてくれただけで、嬉しいと思うべきなのだ。住む世界が違いすぎる『貴公子』なエドとは、相当不釣合いなのだから。
「ご飯食べたら、一緒にあちこち見てまわろうよ」
　気さくな誘いにリンは目を輝かせたが、すぐ眉尻を下げた。お金がない。そんなこと、恥ずかしくて口に出せないけれど。
「ありがとう。でも……ぼくはいいよ。前に買った分がまだ少しあるからそれ、食べなきゃ」
「そうなの？　じゃあ僕は行ってくるけど。また戻ってくるからここにいてくれる？」

うん、とリンが笑顔であごを引いた。貴重品を持ってエドが狭いコンパートメントを出ていく。彼は、扉が閉じるときリンを振り返った。情けなくメガネの少年は笑って手を振る。
静かな廊下を確認するように歩きながら、エドは一人言葉を零した。目線を床に落として、口元に手を添えて。赤い絨毯の上を、音もなく歩きながら。
「……本当にあの子がリン・ユイ？」
考え込むように柳眉を寄せた。
「なにかの間違いじゃないの？　あんな」
あんな。
そこまで言ってから、エドは口を閉ざす。誰かに聞かれるのを恐れたように。

リンは鏡を覗き込んで深いため息をついていた。
ぼさぼさのはねた髪、汚れた頬、小さなひびやキズの入った丸い眼鏡。どんくさそうで頼りない顔は、どんよりと暗い影をまとわりつかせていた。今は眉尻が下がって、ますます情けない。
きれいなエドとは正反対だった。鮮やかな青の、艶やかな毛。大きな金色の輝く瞳。きりっとしたまなざしや、毅然とした仕草がかっこいい。
それに比べて、とリンはため息混じりに服を見下ろす。元はフェルトの暖かなコートははげていて、てかてかだ。所々破けているし、継ぎ当てだらけだ。下に着ているシャツはヨレヨレで、薄汚れていた。裾の方は糸がほつれていて、見るからに古い。深緑の膝丈ズボンも同様だ。虫に食われり、破けたがあちこち空いていた。
兄のニコラのお下がりで、ニコラ自身もだれかのお下がりを着ていたのだ。こんなボロボロの状態だって頷ける。故郷にいたときは、自分の恰好など気にしなかったのに。

エドが宝石なら、リンは小石だった。泥のついた誰の目にもとまらない小石だ。自虐に浸り、何度目かの息をつく。豪華な列車が憂鬱の原因だった。トイレにしても見たことがない程きれいなこの場所が。

リンは鞄を握りしめ、よろよろとトイレを出ていく。そこを、いかつい顔の車掌が通りがかった。あまりにも暗い雰囲気の少年を憐れに思ったのか。その身なりや、子どもが一人でいることに興味が沸いたのか。リンを二人縦と横にくっつけても、まだお釣りがもらえそうな、大柄な車掌は気さくに話しかけた。

「どうした。何だか暗いなぁ？」

「ぼくの恰好、変ですか？」

今にも消え入りそうな声が予想外で、不安だったんだとリンは気づいた。そして口に出せば、一気に不安が流出する。

「ぼく、こんな……こんな、汚くて、列車に乗ってちゃ……っひ……」

突然はらはらと泣いたら、車掌は仰天するだろう。でも涙は止まらない。

「おいおいおい、泣くなよ。俺が泣かしたみたいじゃねぇか」

ちらちらと四方に視線を飛ばし、車掌がおろおろと手を動かす。通りがかった乗客の目が、心なしか冷たく車掌に注がれた。そんな乗客に気づき、ますますリンの背中が丸くなる。

「どうしよう……どうしたらいいの？　だって、っひ、服も何も……」

自分が汚くて、みっともなくて、恥ずかしかった。おろおろしている車掌の制服さえ、ぱりっとしていて立派だ。この星間列車は廊下さえ、いちいち豪華だった。じゅうたんは、足を乗せれば軽く沈んで音も立てない。窓にかかるカーテンは、何気ないのに緻密な柄が入っている。ランプなんてアンティークな意匠だ。前の列車では、劣等感など持たなかった。みんなリンと似たり寄ったりの格好をしていたからだ。

しかし今、こんなリンを、ヒトビトはどう受け止めるだろう。
車掌が困っているのに気づいていても、泣きやめない。大きな身体を窮屈そうに折り曲げて、何かを言っているが耳に入らない。通り過ぎるヒトたちは、きっとリンを笑っている。惨めで消えてしまいたい――
そのとき、大きな手がひょいと少年を持ち上げた。リンは泣き顔のまま、ぽかん、と口を開ける。そのまま広い肩に乗せられてしまった。
「うん、よしよし。泣き止んだな」
「お、おじさん？　え、ええ？」
車掌がそのまま歩き出すのだからたまらない。あわてて男の太い首にリンは手を回す。
「おじさんじゃない、エリックだ。いいから、落っこちないようしっかりつかまるんだぞ」
いかつい顔を、無理やりエリックは笑顔に変えた。肩に乗せてもらえただけでも嬉しいのに、どこかに連れて行ってもらえると知って、リンはぐずりながらも涙を拭う。
「ありがとう……ございます」
車掌は自分の帽子をリンにかぶらせ、ゆったり歩いた。ずしん、ずしん、と進むたび身体が揺れる。エリックは、少年がライトや天井に当たらないよう気を使ってくれた。リンは目元を腫らしながら、笑顔をこぼした。他の乗客がビックリしていて、少し気持ちがいい。
「あんまりはしゃぐと落っこちるぞ」
連れて行かれた先は、列車の中ほどにある風呂場だった。シャワーだけの個室もあるし、五・六人なら足を伸ばして入ることのできる広い浴槽もある。リンは個室の風呂に放り込まれた。
「汚れてるってんなら、風呂に入りゃいいんだ。なぁに、ここならいくら汚しても構わねぇ。ほら、着替えは持ってるか？　クリーニングされるから、服はこっちに入れるんだ。必要なものは、ちゃんとそろってるだろう」

にや、と車掌が見せる太い笑みは、どうだ、と自信に満ちていた。問題ないだろう、と。
「え？　え？　でも、お金……」
落ち着きなく視線を這わせ、ないです、と続けようとしたリンの頭を、ぽんっと車掌が叩いた。
「金なら列車乗るとき、一緒に払っただろが。どら、乗車券（チケット）見せてみろ」
混乱しながら、リンは乗車券を取り出す。なくさないよう封筒に入れて、バッグの奥にしまっていた。あの手紙の次に重要なのは、この乗車券だ。だがエリックは一目見るなり、眉をひそめた。
「お前さん、本当にこれ、自分で手に入れたものか？」
切符を仔細に眺めていたエリックから胡乱げに問われ、リンはしどろもどろになりながらも口を開く。
「それは……貰ったものなんです」
「盗んだんじゃねぇだろうなぁ」
エリックの顔は常時いかつい。それが訝しげにリンを貫いた。
「ち、違います。だってぼくの名前書いてあるって、あの、聞いて……」
消えかけていた不安が、再びそろりと背筋を這った。少年が列車にいること自体、異常なのだ。こんな、すばらしく豪華な列車に。
（どうしよう。ぼくのじゃなかったら、どうなるの）
嘘をつくことはいけないことだとリンは育てられた。嘘をつくのは嫌だ。しかし車掌のエリックに指摘されると、不安でたまらない。もし切符が自分のものじゃなかったら、宇宙空間に放り出されるのか。体が風船のように膨らんで弾けてしまうのか。やっと最果ての駅（エンジャーグル）まで来たのに！
『ほら見なさい。だから言ったでしょう、小さなリンには無理だって。どうして私の言うことが聞けなかったの。私の言う通りにしていたらずっと一緒にいられたのに』
不意にアニエスの声が脳裏をかすめた。アニエスがそんなことな

ど言うはずなかった。だが、リンを責める声がいくつも頭の中を巡る。元々無謀だったのだ。来るべきではなかった。お前みたいな貧しい子どもが乗っていい列車じゃないのだ！

「……っ」

沈黙がどんどんリンを責め立てた。血の気が引いていくのが、わかった。リン自身が買い求めた乗車券ならよかった。でもあれは貰いものだったし、自分のものだ、と聞いたのだ。

「坊主、名前は？」

「り……リン・ユイ……です」

冷たい汗が全身から噴き出る。呼吸をするのも苦しい。ぼくはどうなるんだろう！

リンがパニックに陥っている隣で、車掌は乗車券を簡易チェッカーに通していた。ピピという軽い電子音に、リンがびく、と身体をはずませる。息を呑んで車掌の所作を見守り――

「お、出たでた。ほーら、問題ないじゃないか。悪かったな。これが仕事だからよ、つい悪い癖が出ちまうんだ。別に疑ってるわけじゃねぇからよ……っても駄目か。俺の顔はこんなだしなぁ」

分厚い大きな手が、少年の頭をわしわしと撫でた。リンは不安が拭えないままエリックをみつめる。エリックが苦笑していた。あの押し潰されそうだった威圧感（プレッシャー）が霧散した。

「これはお前さんのチケットだ。お前さんは、この列車の乗客で間違いない」

一気に緊張が解けて、へなへなとリンはしゃがみこんだ。その一言が、どれほど聞きたかったことか。

「これで安心できたろう。ほら、余計な気を揉んでないで、風呂入ってこい。な？　それとお前さん、自由席にいただろ。坊主の席は五〇七号室……指定席だ。次はそこ行けよ」

こっくりうなずいて、リンは汗や涙をぬぐった。疲れが一気に襲ってきて、立ち上がるのも気力がいる。それでもきゅっと結ばれた唇が、未だ緊張している証だった。

（エドだったら）
エドだったらこんな風に疑われることもなかっただろう。リンの貧しい格好が原因だったに違いない。それが哀しくて悔しくて、どうしようもなくて、少年はうつむくしかできなかった。
「ほら、悪かったから、もう泣くんじゃねぇ。男だったらんなことで泣くな。な？」
その後二、三言葉をかわして車掌は風呂場を出た。後ろ手に扉を閉めると肺の中の空気をこれでもかと吐き出す。がりがりと頭をかいて苦笑いを浮かべた。
「五〇七だって？　ありゃあ一等室だぞ。なのに一人だし、ボロ雑巾みてぇなヒト族の坊主だ……。ということは、あれが今回の積荷か？　まいったな。ああもう、聞いてねぇぞ」

戻ってこないな、とエドはふと思った。入れ違いに「ちょっと行ってきます……」とリンが出てから、かなり時間が経っていた。なにをしているのだろう。食事に行こう、と誘ったときには断ったくせに。
（もしかしてコンパートメントの番号がわからないとか？　それとも迷子？）
この縦長の列車で、迷子はないだろうけれど。
（まさかね）
否定しながらも、エドは渇いた笑みを浮かべた。よく似た内装をしているのだ。別のコンパートメントに入り込んだ可能性も十分あり得る。
大体、彼はどうしてこのコンパートメントにいるのだろう。本来ならばここではないはずだ。
しばらく思案したが、エドは深く考えないことにした。だれかの迷惑にならない限り、個人の自由は尊重すべきだ。傍にいることが

優先事項なのであって、ここにいればそれはクリアできている。そして……先のエンジャーグルで手に入れた「小説」があったことを、エドは思い出したので。

4

一般的な「小説」とは立体映像の組み込まれたドラマを指したが、エドの持つものは、紙媒体の、正真正銘の『本』だった。内容（データ）をスキャンし、コンピューターで文字を脳内へ流させることもできたが、エドは『本』という形体を好んだ。睡眠学習の要領で、ストーリーを頭に詰め込むのは手っ取り早いが味気ない。多少荷物がかさばっても、本を持ち歩いては、時間を作って広げた。こうすることで「本を読んでいる」実感を得られるのが好きなのだ。ちょうど今、物語は佳境に突入したところである。

そのとき、遠くで絹を裂いたような悲鳴が上がった。なんだ、と訝るうちにそれがだんだん近づいて、ついに扉が開け放たれる。同時にすっ転んできたのは、一向に戻ってこなかったリンだ。驚きを決して表情には出さず、エドは読みふけっていた本から顔を上げる。

「どうしたの？」

素っ裸を大きなバスタオルでくるんだリンは、あわあわと通路を指差し、

「え、えええええ、えどおおおお！！」

湯気を上げ、濡れた髪を振り乱してリンは叫ぶ。ぽたぽたと髪から滴がこぼれた。良く見ると、リンは身体もろくに拭いていないのだ。メガネもかけていない。

ただ事ではないようだ。うるさそうにしかめ面を作ったエドは、しおりを挟んで本を閉じた。苛々していた。どうしてそう子どもっぽく取り乱せるのか、わからない。

「とりあえず中に入りなよ。なんて恰好してるの」

「あっあっあっ、おっ、追いかけてき……わあああ！！」

半分泣いているリンが不自然に扉から姿を消した。まるで誰かに引っ張られたような消えかただ。エドは驚愕して通路へ飛び出す。リンがいない。一瞬エドは酷く焦って四方に視線を飛ばした。しか

し、「エドぉぉ……」と情けない声が足元から聞こえ、凍りつく。
「な……何やってんのさキミ……」
「助けてぇぇ」
ずりずりとリンは引きずられていたのだ。それに抵抗するため、必死に這いつくばっていた。片手は身体を巻いたタオルを、片手は赤いじゅうたんをつかみながら。その傍に屈んで、エドがリンを覗き込んだ。
「遊んでるの？」
楽しいのか、と呆れまなこで尋ねると、リンの涙目とぶつかった。
「あ、遊んでるんじゃなくって！　ひあああ」
リンを引きずるのは、列車内にたくさんいる雑用ロボットだった。ロボから、いくつものコードが伸びてリンの上半身をぐるぐる巻きにしていたのだ。小柄なリンよりさらに小さなロボだったが、力は強いらしい。少年の抵抗もむなしく、ずんずん引っ張っていく。
「なんだなんだ」
「子どもが遊んでるのか？　ヒト騒がせな」
コンパートメントから何事か、と野次馬が顔を出し始めた。夕食時だ。くつろいでいる最中に、あの悲鳴は耳をつくだろう。何をやっているんだやかましい。ケンカか。子どもの遊びだ、子どもの。だれだ、あの子の親は何をしている。こんな時分に騒ぐなんて――
自身のことではないのに、エドは顔を引きつらせた。まさか雑用ロボに引きずられているとは、思いつくまい。
（でもってあれが、僕の連れだなんて）
「エドぉぉぉ、助けてぇぇぇ」
悲嘆に暮れた叫び声に、エドはため息をついた。尻尾が不機嫌に揺れる。いっそ見なかったことにしたかった。滑稽な叫びはもう遠くなってしまったが、きっと次の車両でも、奇異の視線に晒されているのだろう……。
「放っておく……わけにはいかないんだろうな」
調子が狂っていくのを感じながら、エドは野次馬をかきわけた。

機械に囲まれた生活をしてこなかったせいで、リンはひどい機械音痴だった。風呂に入る方法もわからなかったのだから、相当なものである。
「ちょっと待って。どうやってこれで、あんな騒動になるんだよ」
エドが唖然となった。どうやらリンが難儀したバスルームの設備は、極々当たり前のもののようだ。リンは、雑用ロボに組み敷かれながら、蚊の鳴くような声をあげた。
「……ボタンを押したら……なんか大変なことになって、これが出てきて」
エドがちらりとリンが押したボタンを一瞥し、肩を落とす。
「泡が出てきたり、その、勝手に身体をこすられたり、お風呂も熱くなったり冷たくなったり……」
「そんなに難しいものじゃないんだけどね」
苦笑しながら、エドが雑用ロボを追い払った。涙目状態のリンを立たせ、改めてバスルームの説明をしてくれる。ぐずぐずと洟をすすりながら「ありがとう……」と礼を言った。そこへ車掌のエリックが現れた。リンの騒ぎを聞きつけ飛び込んできたのだ。
「すまんかった。ちゃんと説明してればよかったんだが、コロッと忘れててよ」
情けない有様のリンを見つけ、「面目ない」と大きな身体を精一杯車掌は小さくする。
「もう、邪魔だからあなたはあっち行ってて。僕が請け負うから、ここは」
エドが風呂場の面積を一人で半分占めてしまうエリックを、追い出しにかかる。車掌は「だが」や「しかしだな」とごねたが、ネコ族の少年に睨まれ、すごすごと退散した。リンへの気遣いが裏目に出たことに、責任を感じてくれているのだ。大丈夫ですから、と無

理やり笑顔になったリンへ、出て行く間際「すまん」とうなだれていた。
「悪いヒトじゃないんだけどね。……とにかく、身体あったためておいでよ。そのままじゃ風邪引いちゃうでしょ」
「え、でも……」
「僕もいるから、困ったら呼んで。ここにいる限りお風呂は入るんだから、ちゃんとマスターしてくれなきゃ、こっちも困るんだよ」
う、とリンは怯み……結局再チャレンジが実行された。今度はきっちり説明を受けた。それでも三回ほどエドを呼び出し、水の反乱を止めたり、泡の塊を吸い込んだり、身体を洗おうとする自動装置を止めたりしてようやく。時間にして一時間半が過ぎたころ、リンは魔境を乗り切ったのだ。
あんなの、お風呂じゃない……。げっそりしてリンはバスルームを後にする。
水の出をさまざまな種類（パターン）に変えられるシャワーや、勝手に泡が噴出したり自動（オート）でマッサージ機能が作動するバスタブ、身体を乾かしてくれる温風や、肌を潤してくれる霧（ミスト）、サウナ装置……どうして無駄な装置がたくさんあるのか。普通のシャワーだけで充分なのに。
「つ、疲れたね……」
リンがヨロヨロになって元いたコンパートメントに入り込む。
「ホントーだね」
毛並みの濡れたエドも続いた。二人は同じように柔らかいシートへ腰をおろし、ずるずるともたれかかり、ぽてっと倒れこんだ。体力を消耗しきって、起き上がる気力もない。
「ほんっと、器用だよね。お風呂入るだけなのに、あんな騒ぎ起こすなんて」
「……ごめんなさい」
「結構あちこち行ったけど、あんなの初めてだよ。まさかシャワーも使えないなんて」
「……ごめんなさい」

「ああ、疲れた。なんか僕まで一緒くたにぬれたし」
「……ごめんなさ」
「それ聞いた。もう二四回くらい聞いた。だからぁ」
身を起こしたエドが半眼になって唇を尖らせ、ぐったりしているリンへ手を差し出した。
「お礼に食事付き合ってよ。一人で食べるのつまらないし」
リンはほかほかと湯気を昇らせ、ピンクに上気した顔をあげた。
「さっき食べたんじゃないの？」
「お腹空いたからいいの」
「え？　あ、でもぼくお金あんまり持ってなくて」
リンを引っ張って歩くエドは、ぐるりと振り返った。信じられない、という驚愕と、ああやっぱり、という妙な納得を混じらせた彼は、
「そういうのって乗車券（チケット）についてるんだけど、知らない？　ちょっと乗車券見せて」
リンはたじろぐ。乗車券をエドに見せるのが怖かった。さっきあんなことがあったのに。車掌のエリックとのやり取りが鮮明に浮かび上がった。また、なにか言われるのかもしれない。
「盗らないから安心しなよ。僕だってチケット持ってるんだから乗ってるんだし。行き先も一緒だって言ったよね？」
ネコ族の少年が呆れた表情になる。リンはしぶしぶ乗車券を差し出した。不安がまた、霞みのように心を覆っていく。そしてエドは予想通り、盛大に息をついた。ずきんとリンの胸に痛みが走る。今度は何を言われるのだろう。やっぱり列車にそぐわないのだろうか。
そんなリンの心境を知ってか知らずか、ひらひらとエドは乗車券を振った。「やっぱりね」と呟きながら。
「指定席だよこれ。一等席。ココにある機関全部タダで使える奴。キミ、どうして自由席なんかにいるの？」
え、とリンが瞬く。頭の中が真っ白になった。エドと乗車券を、リンの視線が交互に移動する。

「だって、列車に乗れるってことだけしか教わってなくて……」
そういえばエリックも同じようなことを言っていた。
しどろもどろなリンへ、エドが乗車券をつき返す。
「そんな嘘、誰が言ったのさ。指定区間なら予約なしでも最優先で乗れるチケットだよ。特急・急行指定の、ほとんど最高ランク。わかって言ってるの？　騙されない？」
エドが何を言っているのか、理解できなかった。最優先で優遇される乗車券？　どういう意味だ。では、乗客の出入りを許可された場所なら、自由に行き来しても良いということなのか。この、リンに与えられた乗車券が？　この列車の設備を、使い放題？
信じられない思いで、まじまじとリンはチケットを凝視した。最高ランクだと言うなら、このチケットはどれほどの価値がある？
「自分で確認ししてないみたいだね、そのようすだと。言っておくけど、そのチケットはキミ以外使えないものだよ。星間列車は、三等以上はすべてそうだもの。覚えておくんだね」
不意に、足元が定かでなくなった。ぐらぐらと身体が揺れる。まるで乗り物酔いのようだ。
「ちょっと、大丈夫？　顔色悪いけど」
エドの無自覚な鋭い視線から、リンは顔をそらした。エドが怒っているのではないとわかっているのに、鼻の奥がつんとして、目頭が熱くなる。まただ。リンは赤いじゅうたんを見つめながら思った。エリックのときもそうだった。両肩にずっしりと、何かが圧し掛かってくる。
喘ぐような低い声は、拳を作ったリンが発したものだった。
「……したけど……文字が」
「何？　文字？」
「確認したよ。したけど、文字が難しくて、わからなかったんだ」
何もかもが自分を責めているようで、情けなくなる。
「共通語、まだしゃべるので精一杯で、読むほう苦手で……」
ともすれば、母国語だってあやふやなリンだ。難しい言葉や文字

はたくさんある。当然だ、子どもなのだから。大人と同じ知識を求められても困るのだ。わかっていても、主張できなかった。異分子だと認めると、列車から追い出されそうで怖かったからだ。

エドのため息が追い討ちをかける。リンは堪らずしゃがみ込んだ。風呂さえまともに入れない。トイレだってよくわからない機能がたくさんあった。輝くような内装に、みすぼらしい異分子（じぶん）。リンができるのは、かろうじて話せる共通語のみだ。

お風呂の説明書だって本当はあった。しかし、読めなかったのだ。これを持つだけの価値が、自分にあると、思えない。

このチケットは、自分には重過ぎる。

「わかった。わかったから……泣かなくてもいいでしょ。ゴメンね、キミが遠いところから来たんだって忘れてたんだ」

「こんな遠くまで来たの初めてで、言葉もよくわからなくてっ、ひとりで……」

それまで胸の奥に沈めていた不安や恐怖が、せきを切って溢れだした。リンの目からぽたぽたと涙が零れていく。

「ほんとうは怖くて。でも行かなきゃならなくて、ぼくじゃないとダメって言われてて！　だけどぼく、ここにいちゃいけないみたいで……」

どうしてこんなことを口にしたのだろう。会って間もないのに、エドが困るはずだ。でも涙は止まらなかった。一度吐き出した感情の波は、次から次へとあふれる。

怖かったのだ。なぜかリンひとりだけが選ばれてしまった。ひとりだけで旅をしなければならなかった。大人はついてきてくれなかった。それだけの持ち合わせがなかったからだ。育ててくれた親代わりのアニエスは「しっかりやってきなさい」、と背中を押してくれた。駅まで見送ってくれたリンの大切な家族。その期待を背負って、必死にがんばってきた。だけど！

アニエス、とリンは泣きながら呼ぶ。アニエス、と何度も何度も呼んだ。もう嫌だ。もう嫌だ。もう嫌だ！

見たこともない『ヒト』たちに囲まれて、何とか話せる共通語でここまで来た。たったひとりきりで、故郷から遠く離れて不安だった。最果ての駅（エンジャーグル）に着いてからはなお更だ。見たこともない場所にいるのは恐ろしかった。同じ人族さえ、視界にいないのだ。珍しいものが見られても、先は見えない。何が起こるかわからない。導いてくれるものは、手紙と切符と旅費の、紙だけだ！

誰もいない孤独は、責任感で誤魔化してきた。ぼくは誇らしいんだ、と言い聞かせてきた。好奇心とスリルと、冒険心にすりかえて。けれど、本当は、怖くてしかたがなかった――

（誇りを持って行ってきなさい）

アニエスの言葉が耳に蘇る。アニエス、とリンは呼ぶ。アニエス、と泣きじゃくる。

もう嫌だ。理不尽に責められるのは嫌だ。どうしてこんなことしなきゃならないの。どうしてぼくだったの。ここまで来たのに。やっと着いたのに。もう、嫌だよ。アニエス、助けて。アニエスに会いたいよ。

5

ひとしきりわんわん泣いて涙がかれたころ、リンは顔を上げた。どれぐらい泣いていたのかわからない。もしかしたら少しだけ。もしかしたら一時間ぐらい。時間の感覚がはっきりしない。喉と、目と鼻がいたくて、耳鳴りもしてくる。空虚に口元だけが笑っていた。

エドがいない。

この長い廊下にリンしかいない。泣き喚いて自分の不安までエドにぶつけたのだ、呆れられて当然だった。都合よくだれかが手を差し伸べてくれるなんて、ありえない。リンはひとりぼっちなのだから。

どうしてこんなところまで来てしまったのかな。みんなと離れてまで、どうしてぼくはいるのかな……。

自嘲しながら、リンがのろのろと起き上がったときだ。

「落ち着いた？」

リンが息を詰めて大きく目を見開く。穏やかなエドが、すぐ後ろに立っていた。手にカップを二つ持って、一つを壁にもたれて飲んでいる。リンが驚きに言葉なくエドを見つめると、彼は顔をしかめた。

「……行儀悪いとか、言う？」

カップを持ち上げてエドが首を傾ける。気分を害した風でもなく、普通に話しかけてくれる。

ぼくのことは嫌いになったんじゃないの？　どうしてここにいてくれるの？

尋ねたくて、尋ねられなくて、リンはただエドを見つめるばかりだった。何か言おうと口を開くけれどしゃがれた声しか出なかった。すると、わかっているよとエドが微笑んで、ゆっくりうなずいてくれた。枯れたと思った涙はまた、溢れそうだ。

「飲みなよ。これ、キミが泣いている間にもらってきたんだ」

うんうんと頭を縦に振りながら、リンはカップを受け取った。カップの中身はミルクだ。冷たいミルクが喉を通ると、不思議と気持ちが落ち着いてくる。

――エドが、いてくれた。

たったそれだけのことだけなのに。たったそれだけのことなのに……心の中がじんわりあたたかくなっていく。

「顔洗って、そうしたら食事、付き合ってね？　キミはおなかすいてなくても、お風呂のと大泣きしてくれた罰だから」

エドがすましてそう言った。気遣いが嬉しくて、リンは何度も何度もうなずいた。ぐちゃぐちゃな顔のまま笑顔を作ったら、エドがおかしそうに「ひどい顔だね」とハンカチを差し出してくれた。

赤をベースにした食堂車はそれまで通り過ぎたどの列車よりも豪華だった。

（な、何するとこだろ、ここ……）

うろたえたリンの目が四方八方へと向けられた。大きなシャンデリアはもちろんのこと、並べられたテーブルや椅子は年代を感じさせる凝った造りのものだ。どっしりした木と革張りである。テーブルを飾るクロスも繊細なレースがふんだんに使われていた。いかにも「それ」といった雰囲気だ。ここに来ているヒトたちだってドレスアップをしている。とくに女性は列車の内装に負けないほど、きれいだ。派手に思えたエドの服装が、地味に感じてしまう。

きらきら輝くばかりの世界にきょろきょろとリンは視線を飛ばしながら、居心地が悪そうにエドの後をついていった。エドはウェイターになにやら注文をした後、リンの分も軽く注文してくれる。

テーブルに触れていいのだろうか。磨かれたグラスや銀食器に手をつけていいのだろうか。そもそもこんなところに座っていいのだろうか。捨て犬みたいな格好のリンがいて良い場所なのだろうか！

頭の中をぐるぐると、ちぐはぐな疑問が走り抜ける。やがて食事が運ばれ、リンは唖然とした。見たことのない料理がどんどん並べられていく。動揺を隠せないリンはエドのほうを見て、さらに絶句した。だから、しどろもどろに訊いてみる。
「それ……ひとりで食べるの？」
豪華な料理が、テーブルいっぱい二人の前に並べられたのだ。さらに運ばれてくる。
エドはフォークとナイフを手に、ナプキンをひざに置いて、平然と答えてくれた。
「うん。そうだけど」
リンは思わずエドをしげしげ眺めてしまう。
スレンダーな身体なのに、本当にこれだけの量を片付けられるのか。軽く見ても三人分はありそうだ。しかし、そんな杞憂はすぐに吹き飛ぶことになる。ぺろりとエドは平らげてしまったのだ。
「すごい、ね……エドって」
「そう？　普通でしょ」
かなり普通じゃないと思う。なんてツッコミをリンはしなかった。やっぱりここは不思議なところなんだなぁ、と改めて思った。故郷とは違う場所なのだ。エドの言う「普通」がまかり通ってしまう。食事も、これだけのボリュームが当然なのかもしれない。
感嘆するリンに、今度はエドがたずねた。
「どうしたの？　あまり食べてないね」
ぎくりとリンは肩を弾ませる。
「え？　そんなことないよ」
「じゃあどうしてそんなに残しているのさ」
リンは困ったような、情けない笑顔を見せた。
「なんか、好きじゃなくて……」
（高級すぎて食べる気がしない……なんてエドには言えない）
（それに、上品になんて食べられない）
天敵のように皿を睨みつけ、リンが唇を引き結ぶ。見よう見まね

でナイフとフォークを持ったのに、どう使っていいのかもわからなくて、内心は泣きそうだった。リンはエドの食べ終わった皿と、自分の残っている皿とを見比べてさらに落胆した。テーブルクロスの汚れと、がちゃがちゃと立つ音はリンの側のみだ。他のテーブルから非難の目が向けられているような気がして、落ち着けなかった。だが、エドはなんでもないふうに平然とこなしている。

（おいしいくなんかないよ。本当に高級な料理なの？）

残すのはもったいなくてがんばったが、どうにも口に合わない。けれどエドはおいしいね、と言ってぱくぱくと食べるのだ。リンは困った笑顔を繕うしかできなかった。やっぱり、駄目なのか。精一杯努力しても食事でコレなのだから。

「じゃあ別のにしよう。……苦手そうだしね、キミ」

エドがいたずらっぽく目を細くした。ぺろりと出た舌が赤い。

「別の……？」

また、高級なお料理が出てくるのか、とリンはげんなりする。エドはナプキンで口元を丁寧に拭き、すっと席を立った。

「カフェに行こうよ。デザートはあっちがいいなって思ってたんだ。ね？」

リンは恥じ入った。見抜かれていたのだ。ぽんっと肩を叩かれて、慌てて颯爽と歩くエドを追いかける。エドがくすりと微笑んでいた。

アイスを片手に元のコンパートメントへと二人は戻った。カフェで注文した軽食は後から運んでもらい、部屋でゆっくり食べるのだ。それもエドの配慮からだった。リンがびくびくしながら食事をとらなくてもいいように、と。彼はそんなことなど一言も口にはしなかったが。

「ねえ、次の駅に着いたら外へ行かない？　この列車は急行だから、待ち時間長いよ。気晴らしにもなるし」

「え？　三十分くらいじゃないの？」
エドが、この列車は各駅停車と違って大きな駅しか停まらないことを教えてくれた。
「四、五時間はあるんじゃないかな。急行って数が少ないんだ。おまけにちょっと危険で、乗る人も少ない。だから、停車時刻が長いんだよ」
「二週間で本当にクィダズに着くの？」
「着くよ、何もなければ。ワープが入るから、多少遅れることはあるかもね」
リンが仰天した。
「ワープするの？」
リンにとっては未知の技術だ。列車が星をわたるだけで、とんでもないように感じるのに。
「普通はしないけどさ、危険地帯を通るから止むを得ないんだって。石がごろごろ転がる場所を長い列車が通れないじゃない？　だけど」
「だけど？」
シートにもたれかかって、エドが窓の外を眺めた。真っ暗な海は、景色がもうずっと変わらない。そこに何を見出したのか、エドが頬杖をつく。どこか不安交じりに、
「ワープってまだ不安定なんだよね。短い時間ならまだしも列車は大きい上に長い。平面宇宙を通り抜けるだけで、多少のリスクを伴うわけ。小さいものほど安定してるらしいから。最悪の場合……列車内部に混乱が起こるかも」
だからクィダズ行きの乗車券は高価になるのだ、とエドは付け足した。リンは、危険だから高いのだ、となんとなく理解をする。
「大丈夫なの、この列車……？」
「大丈夫だよ。そういうことは極稀なケースだし、その為に高い料金払ってんだから」
断言されて、リンはにわかに嬉しくなった。
「ねぇ、エドってどうしていろんなこと知ってるの？」

リンが尊敬の眼差しでエドを見る。エドは間の抜けた顔でしばしリンを凝視し、照れたように顔をそむけた。
「これぐらい、常識」
ぶっきらぼうに言い放つエド。リンはにーっと歯を見せる。
リンは、エドが大好きになれそうだった。とても親切なのだ。アニエスに話したい。手紙を出して、教えてあげたい。
文面はこんな感じ、とリンが頭の中で考える。
『アニエス、お元気ですか。ぼくは、とても元気です。
列車はとてもはやいです。エンジャーグル駅は、とてもとても大きな駅でした。
今乗っている列車は一番目の列車より小さいけれど、ごうかできれいです。
それから友だちが、できそうです。ネコのような姿です』
アニエスに教えてあげたくて、たまらなくなってくる。
「あ、ねぇねぇ、次の駅でアニエスにお手紙を出していい？　列車じゃお手紙出せないでしょう？」
リンが軽く身を乗り出した。
「アニエス？」
「うん。大切な人なんだ」
はにかむリンに、エドがさらりと返す。
「恋人？」
「こ、こっこっこっこ！？？」
リンはぎょっとなって立ち上がった。エドの冷静な目がリンを追いかける。
「冗談だよ。いいよ、手紙を出すぐらい。ヴィーグエングは工芸の街らしいから、いろいろ楽しいと思うよ。タイミングよくお祭りだって」
リンは釈然としない面持ちで席につく。少し溶けたアイスを慌ててなめた。手紙に付足さなければ、と思う。じょうだんを真顔で言うヒトですが、と。

「で、キミ、部屋どうするの？　コンパートメント、ここじゃないでしょ？」
リンは首をかしげた。え、でも、とごもごも言うとエドがあきれた顔をする。
「せっかくのチケットだし、移動しないともったいないよ。ここより断然使い心地いいんだし」
それでもリンは、だけど、でも、と小さく繰り返す。
「高い料金払ったんだから使わなきゃ損でしょ？　どうせならいい設備使いなよ。ね？」
リンはこうべを下げ、上目遣いでエドを見た。怒られた子どもが親のようすをうかがうように。
「……なに？」
エドは「言いたいことがあるならいいなよ」と言うように頬杖をつく。
「ぼくねは、そういうのより、こういうとこのが好き……なんだ」
リンは必死になって言葉をつむぐ。
先ほどの食事を思い出した。バスルームでのできごとも思い出した。高級感たっぷりでも、居心地が本当に悪かった。せっかくの食事もおいしいと感じなかったのだ。お風呂でさえ、トイレでさえ、リンにはわからない機能がたくさん付いている。シンプルなこのコンパートメントで、ようやっと安心できるほどなのだから。
「あんまり高級なのは苦手で……。普通のほうがほっとするんだ。エドは思わないかもだけど……。それに」
リンは一度言葉を切った。しん、とした緊張感が空気に滲む。
「ぼく、エドと一緒がいいんだ」
エドが目を見開いた。あわててリンが付け足す。
「だってクィダズまで一緒だって言ったし、よろしくねって握手もしたから、ね？」
一緒に食事だってした。風呂の入りかたも教わった。泣きじゃくる自分の話をちゃんと聞いてくれた。しっかりしなよ、と言ってく

れた。次の駅でもいっしょに回ろうと約束もした。
「だからぼく、ここがいいんだ」
ふ、とエドが微笑した。照れたような泣き笑いのような、でも、嬉しそうな笑顔だ。
「キミって馬鹿じゃない？　せっかくチケットあるのに」
リンが眉尻を下げる。エドは、顔をそらしてごほんっと咳をひとつした。
「安心しなよ。僕も一緒に五〇七号室、行くから」
リンが「え？」と顔を上げた。
エドがコートから取り出したチケットをひらひらと振っている。
「僕は相部屋の相手を探してたんだよリン・ユイ。そう聞いていたからね」
五〇七と記されたリンと同じチケットをエドは見せる。
「知らなかった？　五〇七って相部屋なんだよ。一等室だけど、個人専用じゃなくて家族用なんだって。最初にこのこと言ったんだけど、キミ、外を見てるんだもん。聞いてなかったでしょ？」
ほら、ここにちゃんと書いてある、とエドはチケットの隅を指す。読めない文字だったので、リンが眉尻を下げて笑った。
コンパートメントはだれもいないし、暇だったから探検もかねて探してたんだよ、とエドは言った。相部屋の相手は同じ年頃だと聞いていたため、楽しみにしていたのだ、と。
（そう言えば、エドの荷物って帽子とコートだけだった）
今更ながら気づいて、リンはバカだなぁと思う。クィダズまで二週間もあるのに、エドのようなヒトが着の身着のままなわけがない。
エドは改めて、と右手を差し出した。今度は、手袋をしていないあたたかな手のひらが、そこにある。
「クィダズまでよろしく。僕の名前はエトムント。呼びにくかったら好きなように呼んでね、機械音痴さん」
エドがやわらかく微笑んだ。とても綺麗に見えて、リンは光を撒いたような笑顔を返す。しっかりとエドの手を握りしめた。

「こちらこそよろしくお願いします。ぼくはリン・ユイです」
ふたりは顔を見合わせて笑いあった。

てがみ

大好きなアニエスとみんなへ

お元気ですか？　ぼくはとても元気です。

列車はとても速いです。エンジャーグル駅は、とても大きな駅でした。

今乗っている列車は小さいけれど、ごうかできれいです。キラキラしてました。

ぼくが乗ってもいいのかなぁとドキドキしました。クィダズまではあと二週間で着く予定です。

それから友だちが、できました。エドといいます。

エドはネコのような姿をした王子さまみたいなヒトで、アニエスも大好きになると思います。

次はヴィーグエングという街だそうです。

工芸の街だ、とエドが教えてくれました。今からとっても楽しみです。

では、またお手紙を出します。

お元気で。

リン・ユイより。

てがみ（後書き）

一章『星をわたる列車』はここまでです。
読んでくださって、ありがとうございました。

橘高有紀

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6319i/

星をわたる列車

2010年10月8日15時22分発行